

第4回目 「サバ神社」の不思議・謎に迫る

（2023 年 8 月 23 日放送）

今週からは、いよいよ「サバ神社」の不思議・謎に迫っていききたいと思います。

1. <地域の不思議>に対する一つの見解

13 社が所在する地理的状况を考えると、いずれも特定の川沿いであることです。主たる境川は全長約 70km の二級河川で、源流である町田市相原町から相模原市上矢部まではほぼ、東に流れ、そこから大和市鶴間までは南東に流れ、以降は片瀬海岸まで南に向かって流れます。その間、上流から下鶴間や横浜市瀬谷区の北端までは 43/1000 から 3/1000 の急流で、「サバ神社」が分布する水源から 30km から 40km の中流域に至ると勾配は緩くなり、2/1000 から 1/1000 で南下します。更に、南の俣野から西富にかけては台地が境川を挟む形になっており、源流から流れ下った川は緩い勾配の中流域で溢れやすいのです。境川は昔から暴れ川といわれ、しばしば氾濫した歴史を有します。昭和 57(1982)年 9 月の台風 18 号では川名橋辺りで水が溢れ、鶴沼石上のイトーヨーカ堂の地下売り場が水浸しとなり、数か月間営業停止に追い込まれました。また、平成 2(1990)年 8 月には道路混雑で有名な藤沢橋が境川の出水で崩落する被害もありました。この時は引地川の鶴沼橋も流されました。昭和 40 年から 57 年までの 17 年間に境川で 25 回、引地川で 10 回の出水被害が県の記録に残されています。以降は護岸工事などで災害の発生はありませんが、昔は「サバ神社」の分布域は水害の多発地帯であったことが推測されます。更に、この地域には「クボ」の地名が多く残ることも、溢れた水が滞留する地帯であったことを窺わせます。「クボ」とは回りよりも凹んだ土地を意味し、瀬谷から南に「坊の窪」・「宮窪」・「殿窪」・「北窪」・「北窪河内」・「窪河内」といった小字名がありました。

流域沿いの水田は平安末期から鎌倉初期に始まったと見られます。その面積は江戸後期である天保期でも、相模国の石高の 1.4%、鎌倉・高座(こうざ)両郡の 4.8%とわずかでした。ということは、当地の農民は水害の災難を何としても避けようと水害を見張るため、集落ごとに川に沿って高台に小祠を建て、祀ったのではないのでしょうか。郷土史家の江本好一氏はこの状況を「沢の小祠」と称し、はっきりした神格(しんかく)を持たない「サバ神社」の元々の姿ではなかったかと示唆されています。

川に関連する不思議ということで、関連して<引地川の不思議>を先にお話しします。

<引地川の不思議> に対する見解

藤沢市石川の「サバ神社」は社伝により、「馬サバ」から「魚サバ」へ、江戸時代後期の引地川の水害により、「波サバ」の「佐波神社」に再度改称したとされます。社地は引地川湿地帯の北の端に位置しており、周辺には菖蒲沢・滝の沢など沢が付く地名が多いことを併せて考えると、「波サバ」が地形由来の元々の名称であり、境川と同じ沢の小祠に由来すると考えられます。『相風記』では、石川での「馬サバ」から「魚サバ」への改称は「仮借(かしや)」としています。「仮借(かしや)」とはある意味を表す漢字が無い場合、意味は違うが、同じ発音の既成の漢字を借用する漢字の用法です。

2. <祭神の不思議>について

全国的に例のない祭神源義朝が出現したのは何故でしょうか。義朝と言えば、頼朝の実の父であるという以外に、天養元(1144)年に鎌倉から境川を越えて広大な伊勢神宮の荘園である大庭御厨に侵攻した荒くれ者の印象が伝わります。平治元(1159)年、平治の乱で義朝は平清盛と対立し、清盛の勝利となります。京を脱し、東国に向かう途中、近習鎌田正清の義理の父であった内海庄司長田(おさだ)忠致(ただむね)を訪ねましたが、裏切られ湯殿で惨殺されると言う非業の最期を遂げました。38歳でした。義朝が祭神とされた稀有な例となるのは、非業の最期を遂げた義朝の怨霊を鎮める御霊信仰によるものと見られます。

それでは義朝を祀った人物はだれでしょうか。地域の支配者や集落の名主などの有力者が考えられます。瀬谷のサバ社を古宮から現在地に移したのは当地を知行していた長田喜六郎忠勝で、江戸初期のこの時に義朝の霊を祀ったのがきっかけと郷土史家江本好一氏は推測されています。水害に悩む沢の小祠で暴れ川を鎮めることと義朝の霊を合祀することが、領民の支持を得て、それがこの地の川沿いに広がっていったのでは無いかと見られます。瀬谷村には長田氏が二人いました。長田喜六郎忠勝と清右衛門白政(あきまさ)の兄弟です。この系譜を遡ると長田親致(ちかむね)という人物に突き当たります。この人物こそ、義朝を討った内海庄司長田忠致の兄であり、親致が直接手を下した本人ではないにしろ源氏を自認する家康に仕える身としては不都合でした。この不都合を払拭するために、長田喜六郎忠勝が義朝を祭神に祀り上げたと見られています。瀬谷の「馬サバ」に関し、『相風記』に「源家縁の人の勧請」と記載があるのは、この人と推定されます。

ところで、当地域で何故和泉川流域の3社だけが、満仲が主祭神なのでしょう。諸説ありますが、1つは鎌倉時代の御家人で、当地に屋敷があった泉小次郎親衡(ちかひら)が満仲の弟満快(みつまさ)の十代孫にあたり、満快(みつまさ)が信濃源氏の流れのため、満快では不都合であり清和源氏の満仲に代えたという説です。他の1つは徳川家康の出現前に三河に勢力を有した十八松平の一つ、「能見(のみ)松平」の「松平勝左衛門昌吉」が采地である和泉村の3社の祭神を傍系の義朝ではなく清和源氏の系譜である満仲にしたとの見方です。いずれも義朝対抗の思いから祀り上げられた祭神といえます。

今回はここまでとし、残る3つの不思議・謎については次回の最終回にお話することにします。